Ⅱ　中学校部会

国 語 科 部 会

研究主題　**思考力を育てる言語活動の指導研究**
～読み・考え・表現する授業づくり～

1　主題について

本主題での実践は７年目を迎える。昨今「単元を貫く言語活動」を通して課題を解決することのできる授業づくりが推進されている中で，その具体について部員間で検討し，よりよい言語活動を見いだしていくために，今年度も主題を継続した。

2　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１０日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１０月　８日	第２回総合研究会 指導案検討会（第一中学校）
		１０月２９日	第２回総合研究会 授業研究会（第一中学校）

3　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２６年１０月２９日（水）　　・会　場　第一中学校
・題材名　　１年「シカの落ち穂拾い」　　・授業者　武田　俊樹

①　授業者から

・図表を用いた記録の文章を書くことができるように，図表の役割について考える授業にした。前時までに事実と意見の整理を行った。本時では，図表は事実の部分を分かりやすく説明するために用いるものだということに気付いてほしかった。
・前半部分で教師による図表の説明が長くなってしまったが，グループでの話合いの場面では生徒たちがよくがんばってくれた。

②　協　議

・本文全体を黒板に掲示する工夫があったが，その分生徒に与える情報量が多くなってしまった気がする。部分に区切る，見出しごとに限定するなどの工夫が必要であったのではないか。そのうえで，どんな図表を用いるのが適切かどうか話し合わせてもよかった。
・１つの見出しについて，全体（またはグループ）で適切な図表を考えて，その後に別の見出しについて個で考えさせる流れでもよかった。全体で考えたことを個に戻して考えさせたい。
・図表があるところだけでなく，図表がないところについても考えさせることで，図表の効果をより理解できると思う。
・１時間の中に解決すべきことが多かったように思う。ねらいと本時の学習活動に整合性をもたせる必要があった。
・生徒はグループの中でとても深い話合いをしていたが，それが全体発表の場に生きていなかった。発表者が決められていたが不十分な場合にはフォローするなどの工夫が必要。

・単元を貫く言語活動（単元のゴール）を明確にし，本時の学びがどのように生きてくるのか生徒に意識付けさせたい。
・補助黒板に掲示した資料がやや小さかったので，同じ資料がグループごとに手元にあったほうがよかった。
・個で自分の考えをまとめる時間を設定してから，グループでの話合いにもっていく流れの方がよかった。いきなりグループ活動だったので，グループの役割（記録・司会など）に徹してしまった生徒もいて，個で考える時間が保障されていなかった。

⑵　テーマ研究

ＣＴ研修伝達講習（東中学校　教諭　工藤　央弥）

「国語ＣＴ養成研修の内容とおおだて型学力との関連」

国語ＣＴ養成研修会の内容と「おおだて型学力」とを結び付け，生徒が主体的に学習に取り組むための授業づくりの視点について伝達講習が行われた。

【文章と図表の関連について考える生徒】

⑶　指導助言（北教育事務所　指導主事　谷内　直毅）

・子どもたちの挨拶や，表情，話す態度，聞く態度がよかった。
・掲示や電子黒板等が工夫されていた。黒板に本文の拡大文章を貼る際は，次の時間も役立つように使い方を考えたい。
・話合いの場面で考えを「広げる」だけでなく「深める」ことも考えたい。そのためには，話合いの場の設定をしっかり考えたり，意図的に生徒の思考を促す「ゆさぶり発問」を準備したりして，授業を構想することが大切である。
・どんな力を生徒に身に付けさせたいかを明確にした上で，どんな言語活動が適切か考えていくような単元構想をしていってほしい。毎時間のゴールが単元を貫く言語活動と関連するようにしたい。
・各時間の指導事項や評価規準などが当該学年にふさわしいかどうかきちんと確認してほしい。
・ねらいと学習課題（めあて）と評価規準に整合性をもたせること。できれば学習課題を生徒と一緒につくったり，学習の進め方の留意点などを生徒と一緒に考えたりして，学習意欲の向上や主体的な学習につなげていきたい。
・振り返りの時間を大切にし，本時で身に付いた学習内容や学習方法を振り返らせたり，課題解決に向けた気付きを書かせたりするなどして，生徒の意欲や意識を次時につなげる工夫をしてほしい。

4　成果と課題

⑴　成　果

・授業研究では電子黒板など教具の工夫があり，文章を根拠として真剣に話し合う子どもたちの姿が見られた。また，ＣＴ研修の伝達では「おおだて型学力」の要素の１つである「生徒の主体的な学び」について部員間での共通理解を図ることができた。

⑵　課　題

・付けたい力の育成に適した「単元を貫く言語活動」を設定し，生徒が見通しをもって学習に取り組むことのできるような単元づくり，授業づくりをしていく。